

## 東日本大震災における災害看護活動に参加して

－石巻赤十字病院での看護業務支援の報告－

柏木ゆきえ

### Participation in a disaster nursing activity after the Great East Japan Earthquake

－The report of support for the nursing in the Ishinomaki Red Cross hospital－

Yukie KASHIWAGI

**要旨：**平成23年3月11日に発生した東日本大震災で被災を免れ、地域で唯一の基幹病院となった石巻赤十字病院において、平成23年3月25日から5日間にわたり、本学の看護教員2名が病院看護業務支援活動に参加した。この活動から、被災地病院での看護業務支援において、派遣者の能動的な姿勢や派遣者同士の連携が重要であることがわかった。

**キーワード：**東日本大震災、災害看護、病院看護業務支援

**Abstract:** Because of the Great East Japan Earthquake that occurred on March 11, 2011, two nursing teachers from our school participated in supporting nursing care activity at a hospital for five days from March 25, 2011 in the Ishinomaki Red Cross Hospital, which is the only center hospital in the area. This activity shows the importance of cooperation of any dispatched person's active posture in times of disaster.

**Key words:** the Great East Japan Earthquake, disaster nursing, supporting the hospital's nursing

#### I. はじめに

平成23年3月11日に発生した東日本大震災で被災を免れ、地域で唯一の基幹病院となった石巻赤十字病院には、相当数の患者が搬送されていた。病院の看護師は、自らも被災者でありながら、不眠不休で入院患者や傷病者の手当てをしていた。

日本赤十字社は、3月15日から石巻赤十字病院での病院看護業務支援をするために、全国7ヵ所の赤十字病院から看護師と助産師を派遣した。日本赤十字学園も日本赤十字社と連携し、救護活動に全面的に協力している状況にあった。

本学からも平成23年3月25日から5日間にわたり、著者を含め、看護教員2名が病院看護業務支援活動に参加した。本稿では、この活動内容を報告する。

#### II. 現地の状況

自家発電などを備えた石巻赤十字病院は、災害拠点病院として地域20万人の命を背負うことになった。多くの患者が運び込まれ、震災2日後には、1日1200人を超える患者が来院。病院はロビーのソファや廊下の床も含め、運び込まれた患者と付き添いの家族で隙間のない状態となった。

石巻赤十字病院は、地震発生直後に災害医療対策本部を立ち上げ、来院した患者の対応を開始した。3月12日からは、支援日本赤十字救護班が単発的な避難所巡回を開始。避難所が300以上のほり、その状況を把握するため、3月17日から本格的な避難所ローラー作戦も開始された。翌3月18日、いろいろな組織から参加した医療チームが個別に活動するのは非効率との理由から、東松

島・石巻・女川各市・宮城県・医師会・自衛隊・日本赤十字社・東北大学・東大精神科等の間で協働合意がなされ、3月20日には、災害医療コーディネーターが一元的に統括・協働する、石巻圏合同救護チームがスタートした。この石巻圏合同救護チームの基本理念<sup>1)</sup>は、「限られた医療資源を最大限有効に投入して、石巻市・東松島市（女川町）の医療救護活動を偏りなく行うための協働組織体として、一元的に活動する。石巻医療圏の災害拠点病院である石巻赤十字病院の高次機能の回復を促すために石巻赤十字病院支援を行う」である。活動内容としては、石巻市・東松島市（女川町）の救護活動、石巻市・東松島市（女川町）の医療・救護ニーズのサーベイランス、災害拠点病院である石巻赤十字病院への医療支援であった。

その後、本学看護教員が支援活動に参加した3月下旬には、通常の5倍もの患者が病院に押し寄せていた。患者の多くは避難所の環境の悪さによる、肺炎や感染性の胃腸炎を発病していた。病院では、患者を被災地以外の病院に転院させるなどの対応を図っていた。

### Ⅲ. 病院で働く看護師の状況

我々の支援活動は、震災後2週間を経過した時期であった。津波で家を流された看護師など、数人の看護師は、病棟の一室を生活スペースにして寝泊まりしている状況にあった。治安が悪く家に帰れない、9日間連続して勤務している、という看護師もいた。病棟管理者は、「ミスのないようにするのが精一杯」と話していたが、「家の片付けをさせてあげたい」「スタッフを休ませてあげたい」と連休を取るよう調整していた。しかし、看護師からは、「病院が大変な状況なのに休んでいいのか」という声が聞かれた。

### Ⅳ. 本学看護教員による病院看護業務支援の実際

#### 1) 活動の目的

石巻赤十字病院での病院看護業務支援。

#### 2) 期間

平成23年3月25日(金)～3月30日(水)  
 <5泊6日>

#### 3) 活動状況(表1)(表2)

出発前、すでに病院看護業務支援を行った、日本赤十字社の派遣による第2班派遣看護師を訪問し、支援内容や支援者の生活状況などの情報収集を行った。支援者の生活を知ること、食料や防

表1 病院看護業務支援期間のスケジュール

日 時	内 容
<b>【1日目】</b>	
3/25(金) 10:00	大学を出発
14:00	石巻到着・被災状況を視察
17:00	病院オリエンテーション
<b>【2日目～5日目】</b>	
3/26(土)～3/29(火)	看護業務支援
<b>【6日目】</b>	
3/30(水)	看護業務支援
15:00	第4班へ直接引き継ぎを実施

表2 病院看護業務支援・一日のスケジュール

時 間	内 容
6:00	起床 朝食
8:15(7:30)	モーニングケア 清拭 陰部洗浄 オムツ交換 体位変換
11:00	配膳 食事介助
12:30-13:30	休憩
14:00-17:00 (18:00)	清拭 陰部洗浄 オムツ交換 体位変換 洗髪 手浴 足浴 爪切り 転院・検査に伴う移送 配膳 食事介助 イブニングケア
19:00	夕食 全体ミーティング
22:30	消灯

寒用具、自己管理用薬品を不足なく準備することができた。また、支援の実際をイメージ化できたことは、自己の不安の軽減につながった。

1日目は移動日であった。石巻に到着後、被災状況を視察した。石巻赤十字看護専門学校の学生と教職員は全員無事であったが、校舎の1階には土砂が流れ込んでおり、教材などが散乱している状況であった。学校再建までの道のりの厳しさが危惧された。

病院到着後、病院の概要や外来患者への対応状況などに関して、民間の派遣会社から派遣された看護師と一緒にオリエンテーションを受けた。電気は自家発電で供給され、水道も供給されていた。ガスは部分供給の状態であった。

我々は、日本赤十字社の派遣による第3班派遣看護師26名と宿泊場所として提供された、病院のリハビリテーション室で一緒に生活をした。我々と派遣看護師は、毎晩全体でミーティングをする時間をとった。ミーティングでは、電子カルテに関する情報や病院の衛生材料の状況など、支援を円滑にするための情報を共有した。また、派遣看護師一人一人が一日の振り返りを発表する時間を作った。そこでは、活動内容や支援していくうえ

でのジレンマなどが発表された。

我々は、看護師として病棟での看護業務を日勤で行うことになり、2日目から看護業務支援を開始した。病棟の係長から、入院患者の状況、病棟の配置や物品の使用についてオリエンテーションを受けた。ガスが部分供給のため、お湯は蛇口から出ない状態になっていた。援助に用いるお湯は、給湯器から準備して使用していた。震災後、洗浄効果のあるクリームが病棟に支給されていたため、洗浄をする際に使用し、お湯やオムツの使用量を最小限にする工夫をした。

2日目から最終日までの看護業務支援は、日常生活援助を中心に受け持った。身体の清潔の援助に関して、活動期間の5日間で入院患者の全員の清潔が保てるように援助計画を立て、その計画を病棟看護師と相談しながら実施した。活動期間の途中から、食事介助のために活動開始時間を8時15分から7時30分に、終了時間を17時から18時に変更するなど（休憩時間を延長する）、病棟の状況や患者の状況に合わせて活動行った。

最終日には、全国の赤十字病院から派遣された第4班派遣看護師に引継ぎをした。4班が活動を円滑にスタートできるように、3班と4班の看護師が直接配置先の病棟に赴き、物品の置き場所や活動内容について申し送りをした。

## V. 考察

被災地域においては、看護職者は自らが被災者であっても、同時に医療に携わる専門職者として被災者へのケアが求められる。今回の活動で、被災地病院の看護師が、家族や家を失いながらも、看護職者としての責任感と使命感を持って働いている状況を目の当たりにした。山崎ら<sup>2)</sup>は、被災地の看護職者のストレスへの対策として、応援の要請やボランティアの受け入れなど、柔軟な職員の勤務シフト作成の必要性を述べている。今回の被災地病院の看護業務支援は、柔軟な職員の勤務を可能にし、看護師のストレスの軽減につながったと考える。

病院看護業務支援には、赤十字病院から派遣された看護師をはじめ、民間の派遣会社から派遣された看護師も参加していた。派遣された看護師は、約5日間でローテーションを行った。その結果、被災地病院の看護師は、その対応に時間が費やす必要性が生じているように感じられた。このような状況の中、我々は2つのことを実行した。1つ

は、主体的に援助計画を立て、その計画を病棟看護師に相談しながら援助を実施した。2つ目は、次の派遣者が活動を円滑にスタートできるように、直接配置先の病棟に赴き、物品の置き場所や活動内容について申し送りをした。これらのことは、被災地病院の看護師が派遣看護師に対応する時間の短縮につながったと考える。

## VI. おわりに

今回、被災地病院の病院看護業務支援活動に参加し、そこで働く看護職者の姿を実際に知ることができた。看護職者として、責任感と使命感を持って働いている姿に感銘を受けながらも、看護職者が抱えるジレンマを感じた。

被災地病院での看護業務支援においては、派遣者の能動的な姿勢や派遣者同士の連携が大切であり、それが被災地病院で働く看護職者のストレス軽減につながると感じた。

最後に、今回の派遣は本学教職員と赤十字関係機関の多大な協力により実現したものであり、心より感謝を申し上げる。

## 引用文献

- 1) <http://www.ishinomaki.jrc.or.jp/> 石巻赤十字病院HP
- 2) 山崎達枝, 丹野宏昭. 2004 年新潟県中越地震の被災看護師のストレス反応－新潟県中越地震を体験した看護職のアンケート結果から－. 日本集団災害医学会誌2009; 4: 157-163